

# 原発を拒否できなかつたジャーナリスト

原 淳二郎（ジャーナリスト、慶応大学非常勤講師）

3・11以降、特に福島原発事故が深刻化してから、多くのジャーナリストOBが反省の弁を記している。この私も例外ではない。原発の危険性にうすうす気がついていながら、積極的に反原発、脱原発の記事を書くことしなかつた後ろめたさからくる反省である。

マスコミ業界で原発推進、核の平和利用に積極的に関わった人はすぐに思い出せる。読売新聞の元社長で初代の原子力委員長も勤めた正力松太郎さん。戦後の日本でいち早く原子力に注目した朝日新聞論説委員の田中慎次郎さん。そのほかにも数人の名はすぐに思い出せる。一方、原発の推進に一貫して反対した反原発運動家の名前も思い出せる。しかし、反原発を貫いたジャーナリストの名はあまり思い出せない。なぜマスコミ業界には反原発言論人が少なかつたのか。

電は社長以下みなびりびりしていた。

私が大学時代原子力を専攻していたからだ。学生時代に原子力を専攻したところをたいした専門的知識や経験があるわけではない。現場にいる技術者にはかなうわけがない。それでもびりびりしていた。記者のほとんどは文系出身だったから私は警戒された。

そのころ、朝日新聞科学部が長期連載し、その後一冊の本になった「核燃料」という書物を関電がプレゼントしてくれた。連載は読んでいたから改めて読む必要はなかつたが、聞くと電力会社にとっての良書だから多部署購入し、原発への理解を求めめるために関係する人に配布しているのだという。

当時、原発を運転している電力は東電と関電だけ。他電力がどれだけ買いつけたのかは知らない。朝日新聞が電力会社に拡販したという事実も聞いていない。しかし、こういう過去があつたから、メディアと電力は癒着していると疑われた。

学生時代私ははじめに原子力を勉強したわけではない。未踏の地を歩く探検に夢中だった。それでも、原子力の基本、放射能の被曝は可能な限り低く抑えるべきであること。事故対策は技術的には考えられない事故も想定して設計せよ。いったん大事故が起きたら悲惨な災害にな

政官業のトライアングルならぬ政官業報の4角関係があり、原発の真相が報道されなかつたのではないかと、という批判がいま噴出している。原発利権があるという人もいる。東電などの巨大スポンサーに抗えないマスコミの体質があるというのだ。

私の周りで大手スポンサーの横槍で報道が捻じ曲げられたという事実は体験したこともないし、聞いたこともない。それでも癒着関係が疑われるのはなぜなのか。商業ジャーナリズムの限界といえはそれまでだが、原発と報道の関係については再検証が必要だ。

かつて朝日の先輩が原発について長期連載をしたことがある。科学的には間違つたことはないのだが、どこか違和感があつた。当時私は経済部員として関西電力を担当していた。原発問題で私がいじわる質問をすると、関

ることくらいは学んだ。

専門に進んだころ、米国の原潜が横須賀に寄港、反対運動が盛り上がった。横須賀港では放射能の観測も行われた。大学の教授に質問した。「原潜は放射性物質を含んだ冷却水を放出するのかもしれないのか」。教授はイエスともノーとも答えなかつた。まだ原子力の勉強を始めたばかりだったが、何か胡散臭さを感じた。

これといった確信は持てなかつたが、学生時代すでに原子力技術には不信感を抱えていた。卒業後、多くの学友は原子力関連企業に就職したが、自分はそう長く勤務するつもりはなかつた。たまたま親友が新聞社の入社試験を冷やかして受験しないかと誘ってくれた。受験したら受かつた。その時から原子力は捨てた。

原子力は捨てたのに、新聞社は私の経歴を忘れてはくれなかつた。任地は関電の美浜原発が運転開始する直前の福井だった。原発の取材を期待して配属したのでろう。しかし原子力を捨てた私はほとんど原発記事は書かなかつた。福井の歴史を掘り起こす記事ばかり書いていた。当然、上司のご機嫌は損ねた。

日本原電敦賀発電所から放射性ガスが出ている。従業員の被曝が深刻らしい。そういう問題を聞きつけた場合だけひそかに取材はした。だが裏がとれず、記事にはな

らなかつた。関電美浜原発の取材では、門前払いを食つた。「五月会（関電本社にある記者クラブ）のみなさんに話していいことを地元の記者に話すわけにはいかない」。その時から関電には不信感をもった。

福井を離れたら京都や奈良の神社仏閣を歩き、歴史もこの記事を書きたいと内心では考えていた。しかし、思ひもかけず、経済部へ異動となった。初日にエネルギー問題を担当しろといわれた。学生時代原子力は熱心に勉強しなかつたが、エネルギー問題には関心があった。北炭夕張に住み込んで炭鉱の隅から隅まで見て回った。卒論は「エネルギーコストの変動が日本経済へ与える影響」だったから、それならできると思った。いきなり関電担当となった。

石油ショックの1年前だった。新人なのに「燃え尽きる地球」というエネルギー問題の長期連載の取材陣に加えてもらった。ローマクラブの成長の限界は日本語訳が出る前、主な論文はすでに読んでいた。エネルギー問題の取材はおもしろかつた。その中で原発がやっかいな問題だった。取材すればするほど、核燃料サイクル、使用済み核燃料の最終処分問題が経済的にみて解決できないのだ。原子炉で再び核変換させ放射能を低レベル化するとか、ロケットに積んで太陽に打ち込むなどの馬鹿げた

料電池の普及にも期待した。実用化寸前だった太陽電池には特に期待した。電源多様化のために電力自由化も必要だと考えた。

だが期待通りにことは運ばなかつた。太陽電池は地球温暖化問題で脚光を浴びているが、補助金なしには普及は難しい。燃料電池も水素供給のインフラ整備が贈れ、見通しが立っていない。

原発の発電コストが壁になったのだ。原発の発電原価をどう見積もるかによるのだが、再処理コスト、放射性廃棄物の最終処分コストなどが計算に入っていないから、発電原価が安く見えた。福島原発事故で最大の問題になっている原子力災害時の災害対策費、周辺被害住民への補償費などはいっさい見込まれていない。これらを計算し直したら、原発が最も安い電力だとはいえないはずだ。原子力は最初から夢のエネルギーともてはやされ、メディアも原発の真相を深く追及することがなかつた。

40年に渡って反原発の立場を貫いてきた京大の小出教授がある反原発集会で、「どうしたら反原発を実現できるか」という聴衆の質問にこう答えていた。「それが分かつていたら自分がやっていい」。地域住民の反原発運動しか原発を阻止する方法はない、というのである。

原発はヤバイと感じつつ、日本の原発大国化を許して

アイデアには納得がいかなかった。経済的にみて、核燃料サイクルのコスト、最終処分のコストが計上されていないことも納得できなかった。どう見てもおかしい、と思いつつ、原発建設を止めさせる手は思いつかなかつた。原発が立地する地元の反対運動に期待するしかない。だが、電源三法で地元が潤うようになるとそれも期待できなかつた。

私が考えたのは他のエネルギー源が成長すれば原発はなくてもいいのではないか。それにエネルギー多消費が必ずしも人間の幸福にはつながらないのではないか。省エネ生活で脱原発ができるのではないか。そんな発想だった。

東京経済部へ異動してから、新エネルギーや省エネルギーにつながる情報通信技術の取材に重点を置くようになった。ITが発達すればエネルギーの利用効率が上がる。在宅勤務が普及すれば通勤といわれた満員通勤電車も少しは緩和され、エネルギー消費は減少するのではないか。

LNG（液化天然ガス）が普及すれば石油エネルギーの中東依存度も減らせるのではないか。ガスと電力を一緒に供給する熱電併給システムや、地域冷暖房の普及も熱効率をあげ、原発依存度を減らせるのではないか。燃

しまったメディアに身を置いたものとしては、ほっとすることばであるが、それで免罪符にはならない。

かつてGEを退職した技術者が「原発事故はいずれ起きる。いつ、どこで起きるかが分からないだけだ」と語った。日本の国会でも「電源が喪失したら、炉心溶融が起きるのではないか」と質問した共産党議員がいた。福島原発事故を予言した発言や指摘がたくさんあることが分かつた。スリーマイルやチェルノブイリ事故が今日の悲劇の序幕であったことはだれもが知っているはずだ。それでも日本では脱原発への動きは盛り上がりなかつた。メディアも後押しすることがなかつた。

私も原発の潜在的危険性は理解しつつも原発反対の姿勢を明確にすることはしなかつた。原発推進の記事を書いたら、事故が起きた時、責任を取れないという後ろ向きの態度でごまかしていた。

ジャーナリストは過去に書いた記事が残る。検索もされる。書いていることが一貫していないととかく批判される。だが過去のミスリードを批判されるのを怖がっていつまでも路線変更しないのはもつと罪深いのではないか。ジャーナリストとして原発を葬りされなかつた力不足を反省し、残されたジャーナリスト人生で安全安心な社会の再建に協力するしか道はない。